

平成20年度病害虫発生予報第4号

長崎県病害虫防除所長

【予報の概要】

農作物名	病害虫名	発生程度	
		現況	予想
早期水稲	いもち病(穂いもち) 紋枯病 穂吸汁性カメムシ類	やや少 並	並 並 並
普通期水稲	いもち病(葉いもち) 紋枯病 縞葉枯病(防除情報第6号) セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ	やや少 やや少 やや多 少 やや少 やや少	やや少 並 やや多 やや少 並 並
大豆	ハスモンヨトウ		並
いちご (育苗床)	うどんこ病 炭疽病(<i>G.cingulata</i>) 輪斑病 ハダニ類	やや少 並 やや多 やや多	並 並 やや多 やや多
アスパラガス	アザミウマ類	前年並	前年並
かんきつ	かいよう病 黒点病 ミカンハダニ チャノキイロアザミウマ	並 やや多 やや多 やや多	並 やや多 やや多 やや多
びわ	がんしゅ病 ナシヒメシンクイ	やや少 やや多	やや少 やや多
なし	ナシヒメシンクイ	やや多	やや多
ぶどう	べと病(注意報第2号)	多	多
果樹共通	カメムシ類	少	少
茶	炭疽病 チャノキイロアザミウマ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ カンザワハダニ チャノミドリヒメヨコバイ クワシロカイガラムシ	やや少 やや多 並 並 やや少 やや多 並	やや少 やや多 並 やや多 やや少 やや多 並

【発生予報】 本文の()内は平年値

早期水稲

1. いもち病(穂いもち)

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(44筆)の結果、葉いもちの発生を認めなかった(発生圃場率18.1%、発病株率1.5%)。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、葉いもちの発生を認めなかった(発生を認めない)。

ウ 7月1日に県北地域の一部で発生を認め、平年より遅い発生であった。

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(44筆)の結果、発病株率は0.0%(0.5%)、発生圃場率は2.3%(16.3%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発病株率は3.0%(27.1%)であった。

ウ 向こう1か月の気温は平年並か高い見込みであり本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 粉剤及び液剤は株元に薬剤が十分付着するよう丁寧に散布する。

イ 薬剤散布にあたっては圃場周辺へ薬剤が飛散しないよう十分注意する。

3. 穂吸汁性カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬のイネ科雑草におけるすくい取り調査(30地点)の結果、捕虫網による10回すくい取りあたり虫数は11.3頭(14.1頭)であった(表)。

表 イネ科雑草でのすくい取り調査における虫数の推移

種類別	10回すくいとり当たり虫数						発生地点率	
	H16	H17	H18	H19	平年	H20	平年	H20
ホリハリカメムシ	0.8	0.7	0.4	0.4	0.9	0.4	61.3	66.7
クモヘリカメムシ	0.1	0.0	0.0	0.1	0.3	0.0	8.9	3.3
シラホシカメムシ	0.2	0.3	0.2	0.1	0.4	0.1	35.2	26.7
アカスジカスミカメ	8.5	15.9	10.4	9.0	12.5	10.8	70.5	80.0
計	9.6	16.9	11.1	9.6	14.1	11.3		

注) 数値は10回すくい取りあたりの虫数

すくい取り虫数の平年はH10~19年の最大・小値を除いた平均値

発生地点率の平年はH13~19年の平均値

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降の除草は本田へのカメムシ類の飛来を助長するので行なわない。

イ 本田への飛来が多くなる夕方に薬剤散布すると効果が高い。また、周辺雑草地も含めて広域一斉防除をおこなうと防除効果が高まる。

ウ 薬剤散布にあたっては圃場周辺へ薬剤が飛散しないよう十分注意する。

普通期水稻

1. いもち病(葉いもち)

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(120筆)の結果、発病株率は0.0%(0.1%)、発生圃場率は2.5%(3.3%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。

ウ 7月以降、葉いもちの感染に好適な条件を満たした日が芦辺町で7月2日、大瀬戸町で7月5日に認められた(葉いもち感染好適条件判定モデルによる。詳細はホームページを参照)。

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(普通期、120筆)の結果、発生を認めなかった(発病

- 株率 0.0%、発生圃場率 1.3%)。
- イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。
- ウ 向こう1か月の気温は平年並か高い見込みであり本病の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。
- イ 薬剤散布にあたっては圃場周辺へ薬剤が飛散しないよう十分注意する。

3. 縞葉枯病

平成20年7月15日付け**病害虫発生予察防除情報第6号**による。

4. セジロウンカ

- (1) 予報内容
- 発生程度 やや少
- (2) 予報の根拠
- ア これまでの飛来量は平年より少ない。
- イ 7月上旬の巡回調査(120筆)の結果、セジロウンカの株当たり虫数は0.2頭(1.3頭)発生圃場率は55.0%(59.5%)であった。
- ウ 7月3半旬の県予察圃場(無防除)調査の結果、株当たり虫数は0.06頭(0.9頭)、寄生株率は6.0%(65.1%)であった。
- エ 向こう1か月の気温は平年並か高い見込みであり本虫の発生に好適である。

5. トビイロウンカ

- (1) 予報内容
- 発生程度 並
- (2) 予報の根拠
- ア 6月29日に予察灯(諫早市、五島市)で初確認したが、その後の飛来量は平年よりやや少ない。
- イ 7月上旬の巡回調査(120筆)の結果、株当たり虫数は0.00頭(0.00頭)、発生圃場率は5.8%(3.5%)であった。
- ウ 7月3半旬の県予察圃場(無防除)調査の結果、寄生は認めなかった(株当たり虫数 0.01頭、寄生株率1.5%)。
- エ 向こう1か月の気温は平年並か高い見込みであり本虫の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 今後の圃場での発生状況に注意し、7月下旬~8月上旬にかけて100株当たり20頭以上の成虫の寄生が認められる場合は、それらの次世代幼虫期に防除を行う。
- イ 株元に多く寄生するので薬剤散布にあたっては株元に薬剤が十分付着するよう丁寧に散布する。
- ウ 圃場間や同一圃場内でも偏って発生していることが多いので、できるだけ圃場の見回りを徹底する。また、今後の発生予測は別紙図のとおりであるが、地域や圃場により発生状況が異なることがあるので、それぞれの圃場における発生状況を把握した上で防除を行う。

6. コブノメイガ

- (1) 予報内容
- 発生程度 並
- (2) 予報の根拠
- ア 7月上旬の巡回調査(120筆)の結果、食害株率は0.5%(2.9%)、発生圃場率は14.2%(24.5%)であった。
- イ 7月3半旬の県予察圃場(無防除)調査の結果、食害株率は8.0%(24.5%)であった。
- ウ 向こう1か月の気温は平年並か高い見込みであり本虫の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 薬剤散布は、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7~10日後、粒剤では成虫発生最盛期に行う。なお、粒剤は効果を安定させるため散布後7日間止水する。
- イ 各飛来波の今後の生育予測は別紙図のとおりであるが、地域や圃場により発生状況が異なることがあるので圃場の見回りを徹底し、それぞれの圃場における発生状況を把握した上で防除を行う。

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は平年並で推移している(図)。

イ 向こう1か月の気温は平年並が高い見込みであり本虫の発生に好適である。

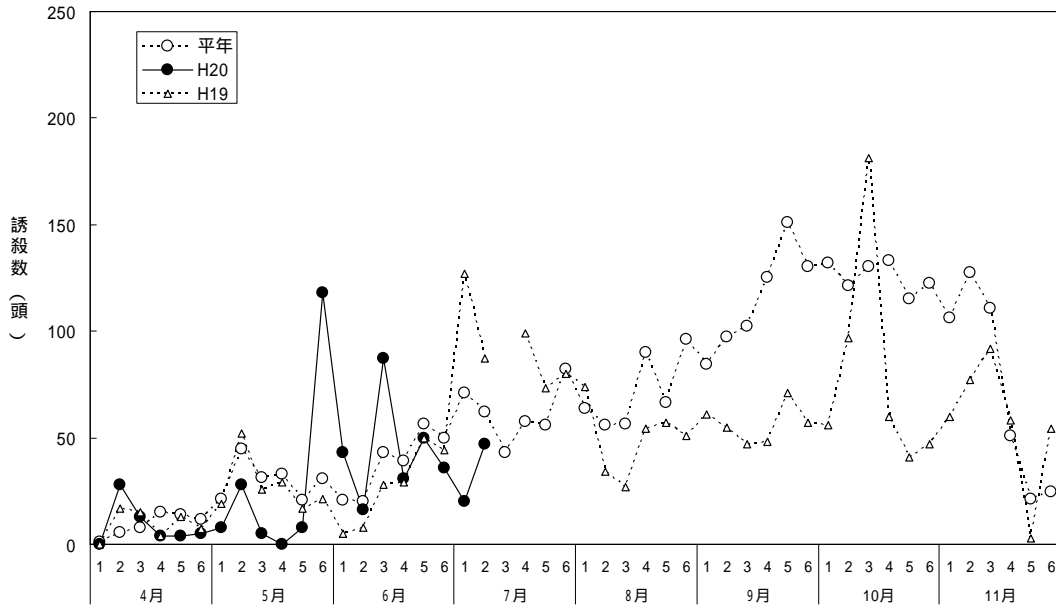


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市)
平年: H10 ~ H19の平均値(最大・小値除く)

(月・半月)

いちご

1. うどんこ病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率3.0%(3.9%)、発生圃場率は15.2%(43.9%)であった。

イ 一部で発病株率が48.0%(過去10カ年の最高値54.0%)と、多発圃場が認められた。

ウ 病害虫防除員からの発生概況報告では、やや少~やや多と地区により発生程度に差がある。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生を認めたら治療効果のある薬剤を散布し、その後定期的に系統の異なる薬剤をローテーション散布し、予防に努める。

イ 草勢が衰えたときや軟弱徒長株は本病が発生しやすいので、通風や日当たりを良くし、適正な肥培管理を行う。

ウ 特に、株冷、夜冷処理するものは、冷蔵処理前の防除を徹底する。

2. 炭疽病(*G. cingulata*)

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発生を認めなかった(発生圃場率1.9%、発病株率0.0%)。

イ 6月下旬の巡回調査(27筆)の結果、発病株率0.0%(0.0%)、発生圃場率は3.7%(0.5%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗床が多湿にならないように、連続した長時間のかん水はしない。密植を避け、排水対策を確実に行う。
- イ 発病した子苗およびその周辺の株は速やかに処分する。除去した発病株や茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。
- ウ 葉の展開間隔にあわせて定期的に薬剤防除する。特に台風などの前後、下葉除去など株を傷つけるような作業後に重点的に行う。

3. 輪斑病

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率は6.2%(1.0%)、発生圃場率は36.4%(11.4%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 被害葉は伝染源となるため栽培上支障のない範囲で除去する。また、除去した被害葉は圃場周辺に放置しない。
- イ 肥料不足は発病を助長するので留意する。
- ウ 過湿条件は発病を助長するので、密植を避け、通風を良くする。

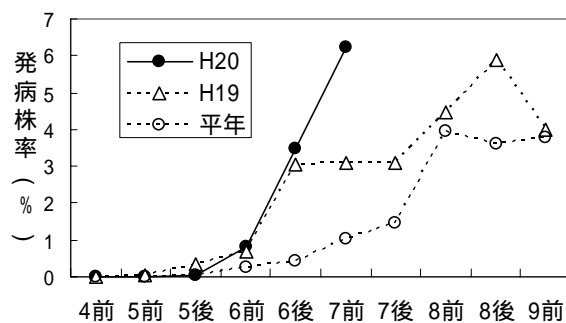
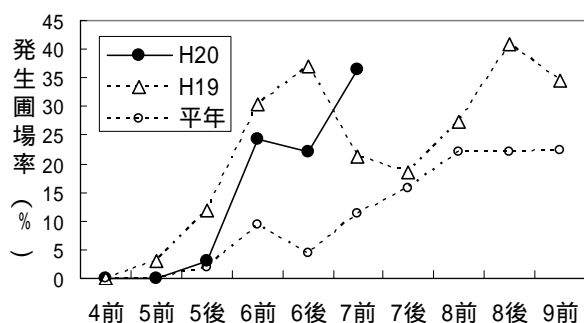


図 いちご育苗床 輪斑病の発生推移(巡回調査)

4. ハダニ類

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、寄生株率は1.5%(0.6%)、発生圃場率は21.2%(4.4%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤散布は散布むらがおこらないように、葉裏まで付着するように十分量をていねいに散布する。
- イ 薬剤感受性が低下しやすいので、同一薬剤は連用しない。
- ウ 本圃での天敵放飼を予定している場合は、薬剤によっては長期間影響を与えるものがあるので、使用時期に注意する。

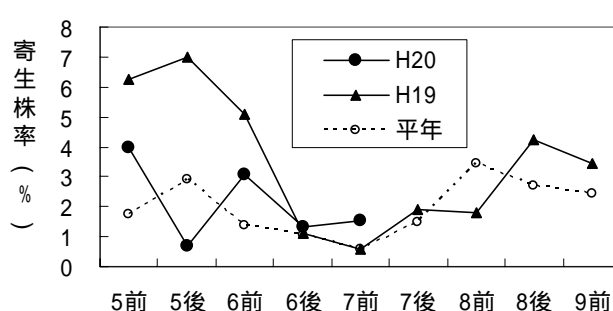
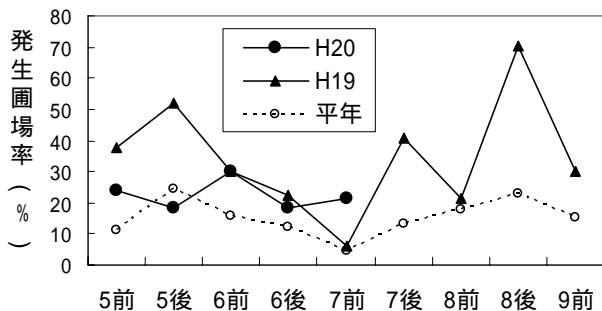


図 いちご育苗床 ハダニ類の発生推移(巡回調査)

アスパラガス

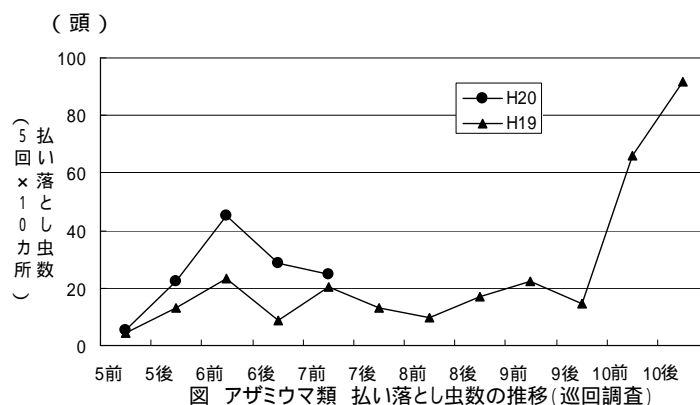
1. アザミウマ類

(1) 予報内容

発生程度 前年並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(9筆)の結果、払い落とし虫数(10.5cm×22.5cmの白色板に5回×10ヶ所)は24.7頭(前年20.6頭)、発生圃場率は88.9%であった(前年77.8%)。



かんきつ

1. かいよう病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、発病葉率は0.8%(1.0%)、発生圃場率は28.2%(26.3%)であった。

2. 黒点病

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、発病果率は3.1%(2.6%)、発生圃場率は38.5%(19.3%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

降雨によって感染が拡大するので、今後の気象に十分注意する。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、寄生葉率は13.5%(11.8%)、発生圃場率は74.4%(47.4%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、果梗部の被害果率3.3%(0.9%)、発生圃場率35.9%(10.5%)、果頂部の被害果率0.9%(0.2%)、発生

圃場率7.7% (2.8%)であった。
 イ 黄色粘着トラップ(諫早市)による誘殺量は、平年よりやや少なく推移している(図)。

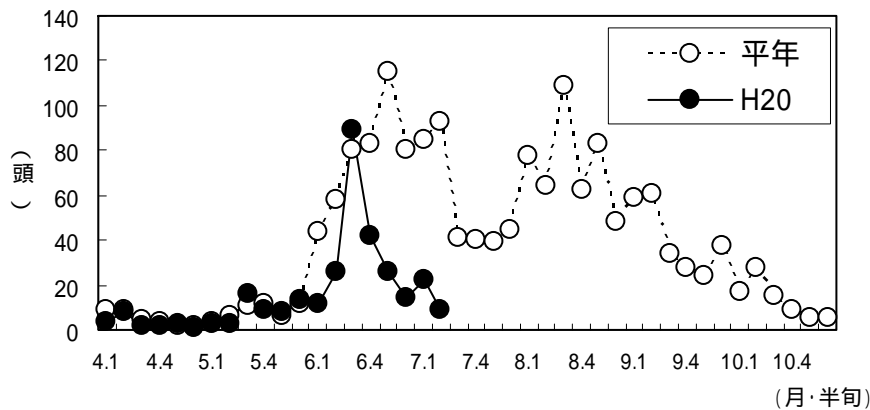


図 チャノキイロアザミウマの誘殺状況(諫早:黄色粘着トラップ)
 平年は平成15~19年の平均

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 下表の予測発生ピーク日5日前から発生ピーク日に薬剤散布をすると防除効果が高い。
- イ ただし、発生が多い圃場では1果当たりの寄生虫数が、0.1頭に達する前に防除を行う。
- ウ 茶、かき、ぶどう、イヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

表 チャノキイロアザミウマ発生予測プログラムによる成虫の予測発生ピーク日

アメダス地点	長崎	佐世保	大村	島原	松浦	大瀬戸	口之津
第4世代	7 / 2 1	7 / 2 2	7 / 2 4	7 / 2 2	7 / 3 1	7 / 1 0	7 / 1 9
第5世代	8 / 6	8 / 7	8 / 9	8 / 7	8 / 1 7	7 / 2 6	8 / 5

- 注1: 使用する気温データには各地域のアメダスデータを利用した。
- 注2: 平成20年7月13日現在で予測し、7月14日以降のデータは過去3年分の平均値を利用した。
- 注3: 各地域のアメダスの海面からの高さは以下の通りである。山間部では予測発生ピーク日が異なる場合があるので注意する。
 アメダス地点海面上の高さ
 長崎 27m、佐世保 4m、大村 3m、島原 9m、松浦 5m、
 大瀬戸 43m、口之津 10m

びわ

1. がんしゅ病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(10筆)の結果、発病枝葉率0.0%(1.4%)、発生圃場率は10.0%(40.0%)であった。

2. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

- ア 7月上旬の巡回調査(10筆)の結果、発生を認めなかった(寄生枝葉率0.0%、発生圃場率2.9%)。
- イ フェロモントラップ(諫早市)での誘殺量は平年よりやや多く推移している

- (図)。
- (3) 防除上注意すべき事項
 食入口ががんしゅ病の感染拡大の要因となるので、がんしゅ病と同時に防除する。

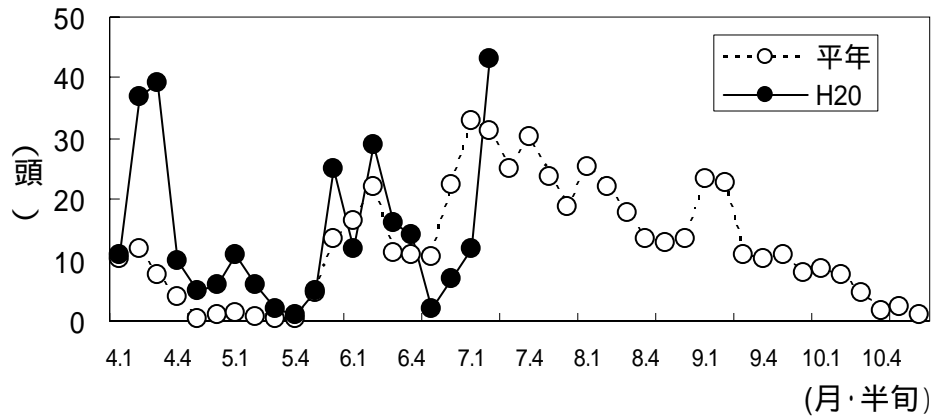


図 ナシヒメシンクイの誘殺状況 (諫早: フェロモントラップ)
 平年値は平成15～19年の平均

なし

1. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

フェロモントラップ (諫早市) での誘殺量は平年よりやや多く推移している (びわの欄参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

合成ピレスロイド剤の散布後、ハダニ類やカイガラムシ類の発生が増加する場合がありますので注意する。

ぶどう

1. ベと病

平成20年7月15日付け、病害虫発生予報注意報第2号による。

果樹共通

1. カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 少

(2) 予報の根拠

ア 各地区のフェロモントラップの誘殺量は平年より少なく推移している。

イ 6月下旬に実施したピーティング調査の結果、カメムシ幼虫の発生を認めなかった。

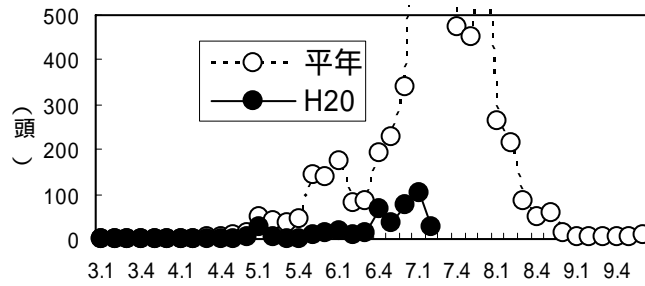


図 チャハネ・ツヤアオカムシの誘殺状況(諫早:黄色コガネコル) (月・半旬)
 平年は平成15～19年の平均

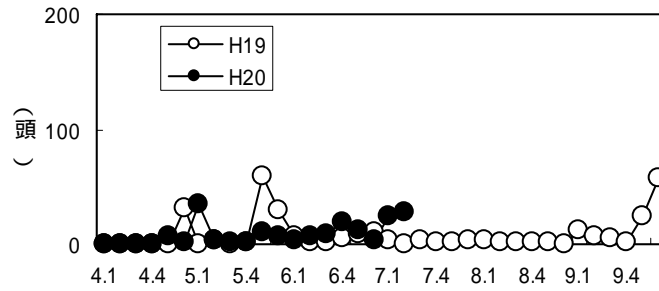


図 チャハネ・ツヤアオカムシの誘殺状況 (月・半旬)
 (西彼:黄色コガネコル)

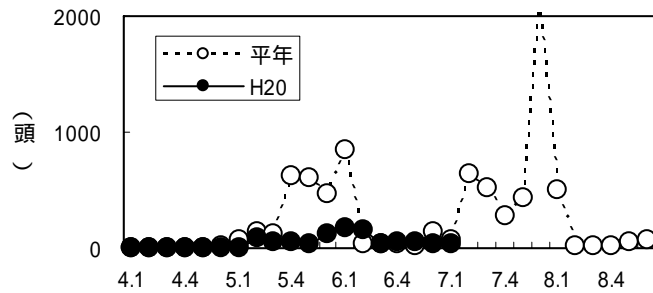


図 チャハネ・ツヤアオカムシ誘殺状況(有家:黄色コガネコル) (月・半旬)
 平年は平成17～19年の平均

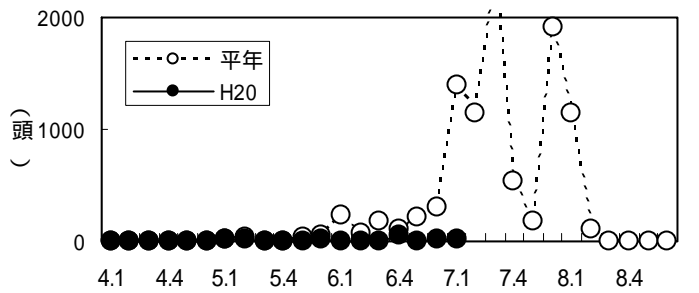


図 チャハネ・ツヤアオカムシ誘殺状況(多良見:黄色コガネコル)
 平年は平成17～19年の平均

茶

1. 炭疽病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡あたり発病葉数は1.2枚(8.0枚)、発生圃場率は55.0%(61.1%)であった。

2. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイに5回×4カ所)は21.6頭(16.3頭)、発生圃場率は95.0%(78.1%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤散布に際しては、使用基準を守る。

3. チャノコカクモンハマキ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡当たり巻葉数0.1枚(0.2枚)、発生圃場率10.0%(10.8%)であった。

イ フェロモントラップによる誘殺量(東彼杵茶業支場調査)は平年並であった(図)。

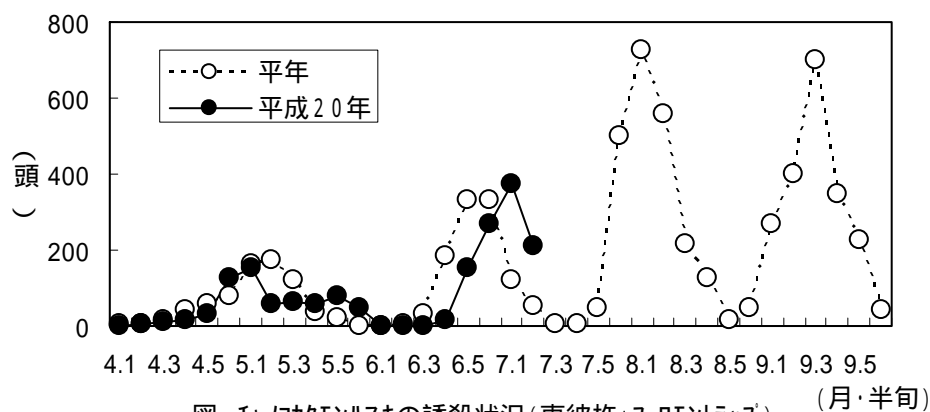


図 チャノコカクモンハマキの誘殺状況(東彼杵:フェロモントラップ)
平年は平成15年～19年の平均値

4. チャノホソガ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、発生を認めなかった(1㎡あたり巻葉数0.1枚、発生圃場率5.8%)。

イ フェロモントラップによる誘殺量(東彼杵茶業支場調査)は平年より多かった(図)。

(3) 防除上注意すべき事項

合成ピレスロイド剤の散布後、カンザワハダニの発生が増加する場合がありますので注意する。

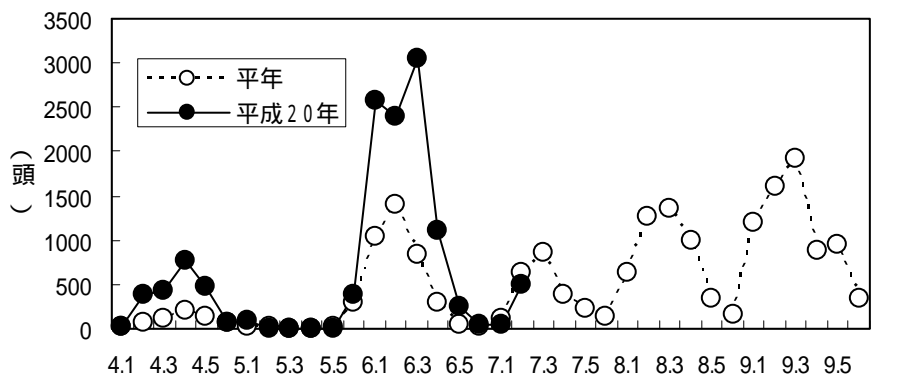


図 チャノホソガの誘殺状況(東彼杵:フェロモントラップ)
平年値は平成15年～19年の平均値

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、発生を認めなかった(寄生葉率0.2%、発生圃場率9.6%)。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイに5回×4カ所)は4.2頭(1.1頭)、発生圃場率は80.0%(34.9%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

幼虫は葉裏に多いので、葉裏にも十分薬剤がかかるよう散布する。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、寄生株率は3.1%(4.0%)、発生圃場率は30.0%(29.7%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤の効果が低下するので、下表のふ化盛期予測日を中心に防除する。なお、独自にふ化盛期日を現地調査し防除適期を判断している地域ではその判断を優先する。

イ 株内の枝や株元に薬液がかかるように十分量散布する。

表 「有効積算温度則による防除適期予測法」によるクワシロカイガラムシのふ化盛期予測日(第2世代)

地区名	東彼杵 太の原	五島 上大津
平成20年	7 / 28	7 / 19

注1：ふ化盛期予測日は「有効積算温度則による防除適期予測法(東彼杵茶業支場)」により算出した。

注2：使用する気温データには、東彼杵茶業支場の気温データとアメダスデータを利用した。

注3：同一地区内でも標高や土地条件でふ化盛期日が異なるので注意する。

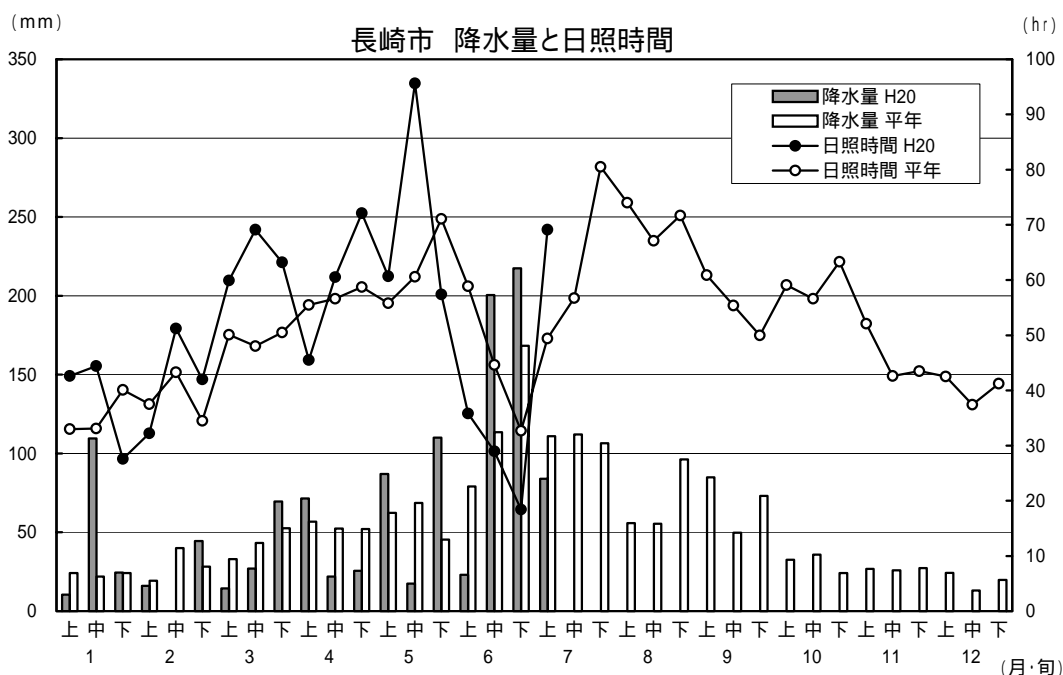
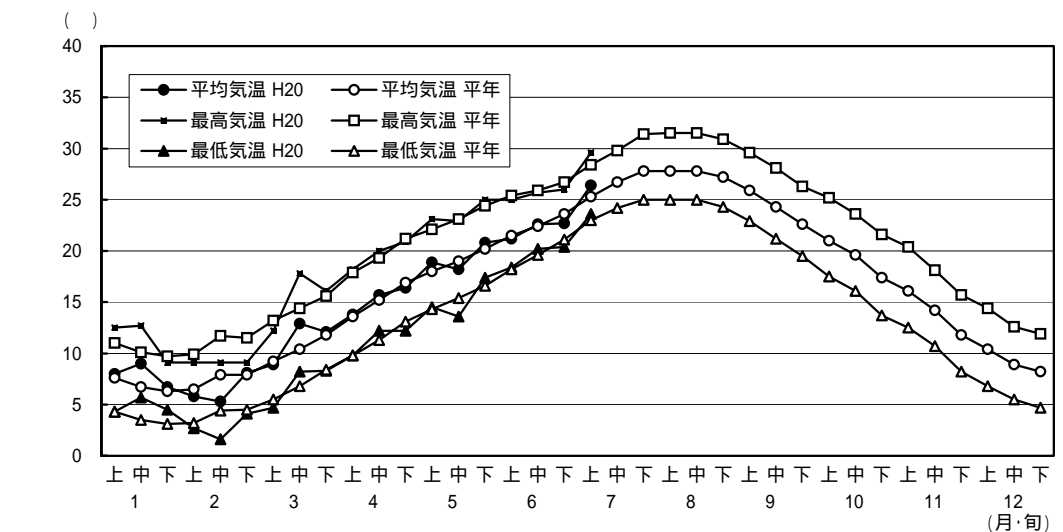
【参考】

気象 (平成20年7月11日発表 1か月予報 福岡管区气象台)
要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	30	50
降水量	40	30	30
日照時間	30	30	40

予報対象地域：九州北部地域

平成20年の気象経過 (長崎海洋气象台)



「農薬使用基準の遵守について」

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルをよく読み、使用基準（適用作物、適用病害虫、使用濃度、使用量、使用時期、総使用回数）及び使用上の注意事項を守って、適正に使いましょう。

病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。

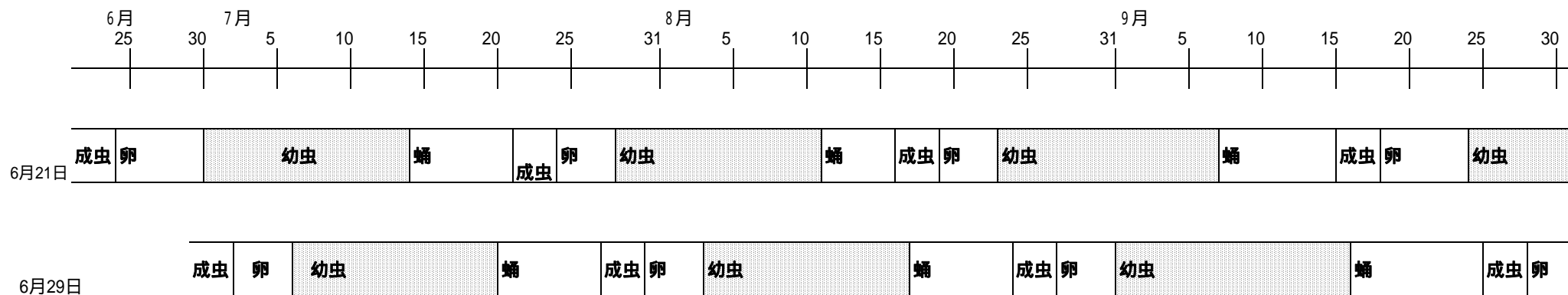
「防除所ホームページ」 アドレス：<http://www.jpnn.ne.jp/nagasaki/>

この情報に関するお問い合わせ

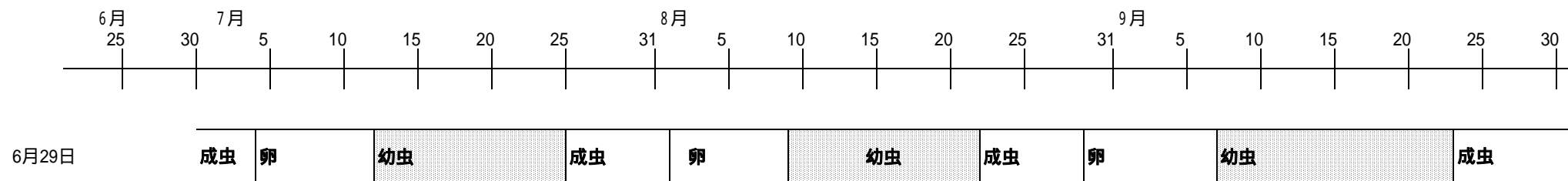
長崎県病害虫防除所 TEL：0957-26-0027

(別紙) 図 コブノメイガ、トビロウンカの発生予測図(平成20年)

1. コブノメイガ



2. トビロウンカ



発生予測の気温は西諫早(総合農林試験場)のデータを用いた(7月14日まで実測値、15日以降は平年値)

